

## 日本語の代名詞の体系：自他の二極関係構造

内間, 直仁

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

125

(終了ページ / End Page)

160

(発行年 / Year)

1981-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012745>

# 日本語の代名詞の体系

## — 自他の二極関係構造 —

内 間 直 仁

### 目 次

1. はじめに
2. 代名詞についての各説
3. 代名詞の問題点
4. 問題点に対する考察
5. 代名詞の代系
6. 定称と不定称における問題
7. 琉球方言の代名詞における二極関係構造

#### 1. はじめに

従来、代名詞としてとりあげられてきた語彙は、他の語彙に比較して、外形上整然たる体系をなしている。いわゆるコソアドの体系で代表されるものである。では、この整然たる外形上の体系を基底から支えている言語主体の意識の構造なり体系なりはどうなっているのかということになると、まだ定説をみないというのが現状であろう。

日本語の代名詞については、これまで文法論で必ずとりあげられ、いろいろと研究されてきている。特に、佐久間鼎（以下敬称は略させていただきます）以来、意識の面もかなり研究され、明らかにされてきているが、その意識が代名詞の体系とどうかわっているのかということになると、問題は多いようである。

日本語の代名詞を論ずるにあたって、これまでの研究のほとんどが大なり小なり比較してきたのは、主に欧米の言語であった。佐久間はポリネシア系の諸語や琉球方言にも言及している

が、これらの言語の意識の面まで立ち入ることはできなかった。

そこで、本稿では、欧米言語との比較ではなく、日本方言の一翼を担う琉球方言の立場からみれば、日本語の代名詞の体系はどうなるかについて、意識の面を中心に据えて論じてみたい。

#### 2 代名詞についての各説

代名詞の特質をどうみるかについては、これまで、名詞の代りに用いられるものとか、指示する語であるとか、あるいは話手との関係概念を表わす語であるなどと論じられてきた。その中で、現在では、名詞の代りに用いられるものというみかたはなくなったが、代名詞の根本的な特質または機能を「指示」とみるか、あるいは「話手との関係概念を表わす」とみるかについては、まだ一定しないようである。

代名詞の体系では、自称（一人称）が「話し手」、対称（二人称）が「聞き手」を表わすと

いう点では、ほとんどの説が一致しているが、他称（三人称）・不定称のみかたとその位置づけについては、各説微妙な異なりをみせる。そのために、自称・対称・他称・不定称が各々どういう関係にあり、その結果、どういう体系を構成するのかということについてもみかたが異なる。

以下、代名詞についての説を、これまでの主な文法論でみてみよう。

## 2.1 大槻文彦

大槻文彦は、『広日本文典全』（明治30年）で、代名詞を次のように定義する（56頁）。

代名詞ハ、名詞ノ一種ニシテ、人、事、物、等ノ名ニ代ヘテイフ語ニテ、且多クハ、同一ノ名詞ノ連出スル時ニ、其煩ヲ省カムガ為ニ用キルモノナリ。

そして、代名詞を大きく人代名詞と指示代名詞に分類し、人代名詞は次のように定義する（57頁）。

人に就キテ用キルヲ、人代名詞トイフ。而シテ、指シテ称スル人ノ位置ニ因リテ、三種ノ別ヲ成ス。

その三種の称は次のものをさす。

自称 話ス人、自ヲ、己ガ名ニ代ヘテ用キルモノ

対称 我ガ話シカクル人ノ名ニ代ヘテイフモノ

他称 対手トノ間ニ話出ス人、又ハ、我ト隔リタル人ノ名ニ代ヘテイフモノ

また、不定称も認めて、次のように定義する。

対称、他称、ノ中ニテ、其名ヲ知ラヌ人、又ハ、夫レト定メヌ人ノ名ニ代ヘテイフ

指示代名詞は、次のように定義する（60頁）。

事物、地位、方向、等ヲ指シ示スニイフ

代名詞アリ、コレヲ指示代名詞トイフ、亦近称、中称、遠称、不定称ノ別アリ。

近称は「最モ近キニイフ」、中称は「稍離レタルニイフ」、遠称は「遠キニイフ」、不定称は「名ヲ知ラヌ、又ハ、ソレト定メヌニイフ」としている。

このようなみかたにたつて、大槻は人代名詞と指示代名詞について、各々別に体系表を示している。

大槻説は、現在の研究レベルからみれば、代名詞の定義や称格のみかたなどでいろいろ問題があるが、しかし、人代名詞での不定称の位置づけは示唆的である。すなわち、不定称は、自称・対称・他称と平面的に並立するものではなく、対称・他称の中でその名を知らない人、またはそれと定めない人の名に代えていうものであるとするとところが特徴的である。

## 2.2 安田喜代門

安田喜代門は、『国語法概説』（昭和3年。服部二郎他編『日本の言語学』第四巻大修館所収）で、代名詞を次のように定義する。

代名詞の本質は、実体の特有性の声音的記号たる名詞の存否を離れ、全く別の立場に立って実体を指示し、対話者の間に、共通的な注意の焦点を作るにある。故に代名詞は、体言中、ものを指す語であると言へば足る。

また、さらに、

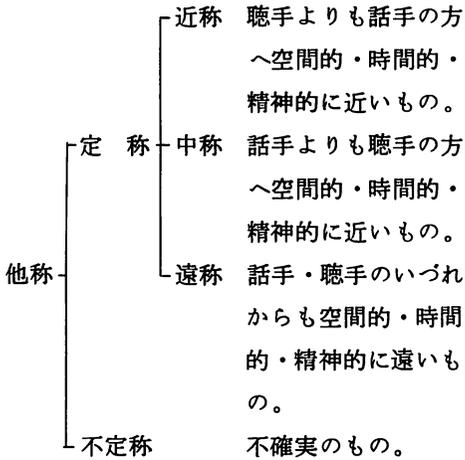
さてこの運動（筆者注、指先での指示）の表わす指示は、如何なる心的作用であるかといふに、思想的には宇宙の中心にある自己を中心として、凡ゆる物の位置をこれから割出したものである。

と述べ、その立場の違いによって、次のような

称格が生れるとみる。

自称 話手が自らを指すもの

対称 話の聴手



一方、主観の傾向や位置による上記称格とは異なって、代名詞には、対象の客観的質差による事物・場所・方向・人・時間などの範疇もあると述べ、上記称格とこの範疇とを組合わせて、第1表のような体系表を示している。

第1表

			わ	あ	自 称	
			わ れ	あ れ		
				な	対 称	
				な む ぢ れ		
			こ		近 称	他 称
			こ ち	こ な た こ れ		
			しそ		中 称	
			そ ち	そ な た こ れ		
			あか		遠 称	
			を あ ち	あ あ あ か し そ し こ こ れ		
	た		い づ		不 定 称	
い つ	た れ		い い い づ づ づ か ち へ し た	い い い づ づ づ ら こ く な づ ぢ れ		
時 間	人	方 向	場 所	事 物		

安田説は、これまでの説に比較して言語意識に踏みこんで研究し、代名詞の本質に一段とせまったものであったが、後で問題にするように、安田説でいう「他称」の位置づけで問題を残したといえよう。

### 2.3 松下大三郎

松下大三郎は、その著『改撰標準日本文法』（昭和5年）で、代名詞を次のように定義している（223頁）。

代名詞は或る基準を設けその基準と事物との関係に依って指示的に間接にその事物を表示する名詞である。実質的意義が指示に由って臨時に定まるものである。

そして、代名詞の種類として人称代名詞・位置代名詞・種々の代名詞の三種を認める。

人称代名詞は、「説話者（思想者）が自己を基準として自他を区別する代名詞である」（232頁）として、その称格としては次のようなものを認める。

第一人称 説話者が自己を指す。

第二人称 説話者の対者を指す。

第三人称 自己・対者より以外のものを指す。

位置代名詞は、「説話者（思想者）が自己を基準として其の位置の遠近に由って事物を指示する」（233頁）とし、その称格としては次の三つを認める。

第一近称 自己に近いものを指す。

第二近称 対者に近いものを指す。

遠称 自己にも対者にも遠いものを指す。

また、その指すものは自他共に知って居る事物に限る。

また、「これ」「それ」「あれ」の用法について、次のようにも述べている（235頁）。

つひ今言ったことは自分の頭でも概念が

新しく対者の頭の中でも現在受取ったばかりの概念であるから「其れ」或は「此れ」を用ゐるが、此れから云はうとすることは対者の頭にはまだ其の概念が無いから「此れ」といふ。唯ずっと前に云ったことは双方の既知に属するから「彼れ」といふ。

種々の代名詞としては、「己」「人」などをあげている。さらに、「誰」「どこ」などのいわゆる不定称の代名詞は、松下文法では未定名詞として、本名詞・代名詞・形式名詞とともに名詞の一種とされている。

松下説は、松下のいう人称代名詞と位置代名詞とが各々別々に体系づけられていて、両者の関係についてはさほどふれられていないなど問題があるが、しかし、人称代名詞の定義で「自己を基準にして自他（筆者傍点）を区別する代名詞である」とした点は卓説だったと思う。ただし、せっかく「自他」の区別を説きながら、三種の称格を認めたところは一貫しない。また、位置代名詞では、称格を近称と遠称に大きく分け、いわゆる不定称の代名詞を未定名詞としたのも示唆的である。

### 2.4 山田孝雄

山田孝雄は、『日本文法学概論』（昭和11年）で、代名詞を次のように定義する（119頁）。

代名詞とは名目（name）をいふ代りに用ゐる詞の義にして、体言の一種なるが、概念そのものを直接にあらはさずして、ただ其を間接にさすに用ゐらるるものなり。

さらに、

代名詞の性質は既に述べたる如く主観的のものにして、そのさす実体は説話者の観点の置き所又思惟のし方によりて任意に補填せらるべきものなり。而して代名詞の代名

詞たる特徴即ち名詞と異なる点はこれがただ概念たるに止まらずして、その内容が主観によりて如何様にも変更せらるべき点にあり。たとえば甲といふ特定の人もそのさし方によりて第一称格ともなり、第二称格とも第三称格ともなるなり(120頁)。

とも述べている。

そこで、代名詞を反射指示と称格指示とに分け、反射指示については次のように述べている(121頁)。

称格の如何に関せずして専ら実体そのものにつきて指すものをいふ。即ち実体その者を絶対的に指示するものにして、多くは一旦あらはれたる体言につきてそれ自身をささすに用ゐらる。

反射指示の代名詞としては、「おのれ」一語であるとしている。

称格指示は「説話者の意向によりて称格を区別せられたる指示によれるものをいふ。」(122頁)とし、称格については、「説話者の関係的意向によりて区別せられたる指示の方法をいふものにして、この三種を以て一切の事物を指示し得べきなりとす。」(124～125頁)としている。

この三種の称格とは、次のものをさす。

第一称格(自称) 説話をなす者自身をさす。

第二称格(対称) 説話を聴取する対者をさす。

第三称格(他称)

定称

近称 人、事物、場所、方向等につきて対者よりも説話者に空間的に若くは時間的に近きか、或は又精神的に親しきものを指示する。

中称 説話者よりも対者に近きか親しきの関係にあるものを指示する。

遠称 説話者のいづれにも近きか親しきか関係を離れて指示する。

不定称 其のさす処の実体の確定し居らぬものを指す。

以上のようなみかたにたつて、代名詞の体系を第2表のように示す(『日本口語法講義』大正11年 38頁)。

第2表

(僕)		(おれ)	(われ)	わたし	わたくし	(第一称格)	(第二称格)	第三称格
		(きみ)	おまえ	あなた		(自称格)		
こ	こ	こ	こ	これ	近称	定称	第三称格	(他称)
ち	ち	ち	ち	それ	中称			
あ	あ	あ	あ	あれ	遠称	不定称	(他称)	
ど	ど	ど	ど	だ	だ			
ち	ち	ち	ち	な	な	不定称	(他称)	
ら	ら	ら	ら	れ	れた			
方	場	事	人					
向	所	物						

山田は代名詞を研究するにあたっては、主観のありさま、すなわち指示の方法に着眼点を置くべきだと述べながら、「指示」そのものに代名詞の第一の特徴を認めたがために、その当然の帰結として反射指示の代名詞をも認めざるを

えなかったものと解される。

## 2.5 佐久間鼎

佐久間鼎は、安田喜代門の代名詞の定義（指示の機能）を肯定し、その著『現代日本語の表現と語法』（昭和11年）で、代名詞を次のように定義する（6頁）。

いわゆる代名詞の職能を「指示」あるいはオリエンテーションに認めるとすれば、自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置をとり、どの方向にあり、どういう有様を呈しているかについての立言が、直接にこれによって指されるのは当然で、こうして話し相手との関係におけるいわゆる人称代名詞の称格、すなわち自称・対称・他称および不定称が分かれ、対象の指示における、いわゆる指示代名詞（または事所代名詞）について近称・中称・遠称および不定称が分かれる次第です。

そして、人代名詞における自称・対称・他称と指示代名詞の近称・中称・遠称とは、「内面的な交渉」があるとし、次のように述べている。

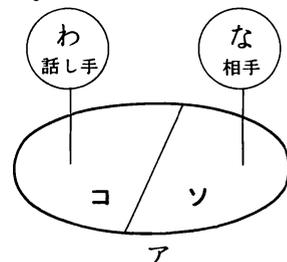
「これ」という場合の物や事は、発言者・話手の手のとどく範囲、いわばその勢力圏内にあるものなのです。また、「それ」は、話し相手の手のとどく範囲、自由に取れる区域内のものをさすのです。こうした勢力圏外にあるものが、すべて「あれ」に属します（22～23頁）。さらにつづけて、

その辺の事理を、次のように図をもって示すことにすると、はっきりわかると思います。話し手とその相手との相対して立つところに、現実のはなしの場ができます。その場は、まず話し手と相手との両極によって分節し、いわば「なわばり」ができ、

その分界も自然にきまって来ます。前にのべたように「これ」は話し手自身の勢力範囲に属します。はなし手というかわりに、「われ」の「わ」を名としてこれを「わ」のなわばり」といってもいいわけです。これに対して、「それ」は相手の勢力範囲の中のをさしているわけで、「なれ」の「な」をとって「なのなわばり」に属しているということが出来ます。そこで、前者は「ここ」に当り、後者は「そこ」に当るという関係になります。これをそれぞれ（コ）と（ソ）で代表させますと、それ以外の範囲はすべて（ア）に属します。「こちら、こっち」と「そちら、そっち」と「あちら、あっち」との関係も、この「わ」-「な」の対立の現場の事態に徴して意味をもつわけです。

この話し手と相手との対立する話の現場は、やがて眼前の指示の場に外ならないのです。ここで、指示する、ゆびさすという動作をし、ことばによってそれを表現するものは、話し手その人に外ならないわけです。指示されるもの、ゆびさされるものには、人があり、また物や事、場所などがありますが、そのばあいの人と事物などとの間に対応の関係が成ったわけです（34～35頁）。

と述べ、次のような図と第3表のような体系表を示している。



第3表

不定	はたのもの人	相手手	話し手		
	(第三者)(アノヒト)	(話しかけ)の目標 オアマエタ	(話し手自身)ワタクシ	対話者の層	指示されるもの
ダ ナ レ タ	(はたのもの)ア系	(相手所属)ソ系	(話し手所)コ系	所属事物の層	
ド 系					

このように、人代名詞と指示代名詞は、それぞれ別個の体系を形づくりながら、なお、両者の間には対応が認められると述べている。

代名詞を話し手の心理の面から説き、それを体系的に明らかにした佐久間説は、従来の代名詞論を一躍進展させたものであったが、ただし、その説にも、次のような問題点があった。

- 1) 佐久間は人代名詞に「こいつ、これ、このかた」「そいつ、それ、そのかた」の語があることは認めているが、それらの語が表では位置づけられていない。「こいつ、これ、このかた」は「対話者の層」の「ワタクシ、ボク」のワクにも位置づけられないし、同様に「そいつ、それ、そのかた」は「アナタ、オマエ」のワクに位置づけるわけにもいかない。かといって、「所属事物の層」のどこにも位置づかない。これらの語をどう位置づけるか

によって、体系表もまた全体がかわってくるであろう。

- 2) コ系の中心に話し手、ソ系の中心に聞き手をおくのはよいが、ア系の中心に「アノヒト」をおくのは妥当でない(注1)。同様にド系の中心に「ドナタ、ダレ」をおくようなかたちで表示をしているが、これも問題である。これらは、いずれも代名詞の体系をどうみるのかということと深くかかわっている。

## 2.6 橋本進吉

橋本進吉は、『新文典別記口語篇』(昭和23年)で、代名詞を次のように定義している(32頁)。

代名詞は、名詞と違い、事物自身に具はってある性質(特性や共通性)によって名づけたのではなく、話手を基点として見た、これ等のものに対する関係に基いて、事物そのものを指していふ語であります。

これは、まず話し手と事物との関係を第一にあげ、その関係に基いて事物を直接に指している語であると規定している点で、妥当な定義であろうと思われる。いわゆる「指示」の機能を、安田・佐久間のように第一にはあげていない。このように、話し手と事物との関係を第一にあげたことは正しかったが、その関係のとらえ方は、次に述べるように、従来の説以上には出なかった。

橋本は、代名詞を人代名詞と指示代名詞に分類するが、理論上からいえば、指示代名詞は人代名詞に対立するものではなく、ただ人に関するものと、それ以外のものとに分類して、取扱いを便にするだけのものであると述べている(47~48頁)。

代名詞の称格としては、次のようなものを認

めている（49～50頁）。

自称（第一人称） 話手が自己を指し示すのに用いる。

対称（第二人称） 話対手を指し示すのに用いる。

他称（第三人称） 話手・対手以外のものを指し示す。

近称 話手に近いものを指す。

中称 話対手に近いものを指す。

遠称 話手にも話対手にも近くないものを指す。

不定称 話手にわからないもの又は或一つのものとは定めずに何でもよいものを指す。

橋本はまた、その代名詞の定義からはみでる「反照代名詞」も認めている（48頁）。そして「自分」「自己」「自身」「おのれ」などがそれに属するとみている。これは、山田文法の「反射指示」などの影響を残したものと解される。

## 2.7 時枝誠記

時枝誠記は、『日本文法口語篇』（昭和25年）で、代名詞を「話し手との関係概念を表現する」語であるととらえ、次のように定義する（74頁）。

人称代名詞の特質は、話し手との関係概念を表現するところにあると云ふことができる。（中略）。話し手との関係といふことは、その人が聞き手であるか、話題の人物であるか、或は話し手自身であるかといふこと以外には無いのである。代名詞の特質を、以上のやうに、話し手との関係概念の表現といふことに求めるならば、そのやうな関係に置かれるものが人であるか物であるかといふことは、代名詞の本質を左右するものではない。そこで、そのやうな関係にあるもの

が、事物、場所、方角である場合には、これを指示代名詞といふ。事物、場所、方角等は、話し手との関係に於いて、話し手となったり、聞き手となったりすることは、擬人的用法以外には考へられないから、それは常に第三人称の立場に立つのである。人称代名詞が、話し手との関係概念を表現すると同時に、そのような関係に立つ「人」そのものをも含めて表現するやうに、指示代名詞もまたそのやうな関係に立つ「物」を同時に含めて表現する。

話し手と事物との関係を表現する語であるということは、すでにこれまでの説にもみられるが、時枝文法ではその一点において代名詞を定義したということで特徴がある。その関係概念を表現するという立場からみれば、これまでなされてきた人称代名詞と指示代名詞の区別も本質的なものではなく、また従来連体詞とみなされてきた「この」「その」「あの」「どの」（時枝は、これらの語は、話し手と事物との関係概念だけを表現し、そのような関係にある「物」をも含めて表現するものではないとみている）なども、代名詞の範疇に所属せしめるべきものであると説く。

そして、話し手との関係によって生じる表現差、いわゆる称格には、次のようなものがあるとする（73～75頁）

第一人称 話し手が自分自身を話し手という関係において表現する時にのみ用いられる。

第二人称 話し手が他者を聞き手としての関係において表現する時にのみ用いられる。

第三人称 話し手が他者を話題の事物としての関係において表現する時にのみ

み用いられる。

近称 話手に近い関係にあるもの。

中称 聞き手に近い関係にあるもの。

遠称 話手・聞き手に対して第三者的  
関係にあるもの。

不定称 不定であるもの。

以上のみかたに基いて、代名詞の体系を第4表  
表のように示す(80頁)。

時枝が代名詞を話し手と他者との関係を表現  
する語ととらえたところは肯首すべき見解であ  
ったが、他者との関係を認識主体がどう認識し、  
カテゴリー化しているかということになると、  
必ずしも十分だったとはいえない。そのために  
代名詞の体系は従来のと比較すると、かなり整  
備体系化されているとはいえ、おおむねにおい  
ては、それほど変わっていない。

第4表

情感	関係	方角	所	物	人	の事柄類 の話し手と の聞き手と	
						近称	中称
○	○	○	○	○	僕 わたくし	(話 手) 第一人称	事 柄 (第三人称)
○	○	○	○	○	君 あなた	(聞 手) 第二人称	
こ う な に	こ の	こ ち ら	こ こ	こ れ	こ の か た	近 称	
そ う な に	そ の	そ ち ら	そ こ	そ れ	そ の か た	中 称	
あ ん な に	あ の	あ ち ら	あ そ こ	あ れ	あ の か た	遠 称	
ど う な に	ど の	ど ち ら	ど こ	ど れ	ど の か た	不 定 称	
名 詞 的 代	代 連 體 詞 的	名 詞 的 代					

## 2.8 阪倉篤義

阪倉篤義の代名詞論は、その著『日本文法の話』（創元社 昭和27年）と『改稿日本文法の話』（教育出版 昭和49年）でみることができる。ここでは、後者に従ってみることにする。

阪倉は、代名詞を「話し手の立場からの関係の識別が加わっている」（149頁）語ととらえ、その関係の識別は、次のようであると説く（150～155頁）。

第一人称 話し手自身をさすもの。

第二人称 聞き手をさすもの。

第三人称 話し手・聞き手以外の人、またはものをさすもの。

近称 話し手自身を中心とする円周内に含められるものと認定しての表現。自分に属するものとしての表現。

中称 聞き手を中心とする円周内に含まれるものと認めての表現。聞き手に属するものとしての表現。

遠称 話し手と聞き手とを同時に中心にするような、大円周内の中に含まれたものと認めての表現。指されるものは話し手と聞き手に共に了解されているものでなければならない。

不定称 話し手・聞き手を中心とする円周内の、どれにも含まれないものを表わす。

以上のみかたに基いて、代名詞の体系を第5表のように示す（156頁）。

阪倉説では、近称・中称・遠称を定義するにあたって、「話し手」「聞き手」「話し手・聞き手」を中心にすえて、それぞれの円周内に含

められるものと認めての表現としている。これは、時枝説の延長上にあって、たとえば時枝で「話し手に近い関係」（近称）とあるのを、「話し手を中心とする円周内」と定義することによって、佐久間の「なわばり」説もとり入れて、より明確にしている。また、遠称のA系は話し手・聞き手両方に了解されているものでなければ指すことができないとみたのも卓説であった。

しかし、このような阪倉説にも多少問題がある。たとえば、話し手が自身の立場から他者との関係をとらえるとき、話し手とコ系で指されるものとの関係、聞き手とソ系で指されるものとの関係、その関係のとらえ方は、話し手においてほぼ同じである。すなわち、どちらの心的領域に属するかという関係のとらえ方である。しかし、話し手・聞き手とA系で指されるものとの関係は、これらと同じ次元での関係としてとらえられるかという、必ずしもそうではないものと解される。阪倉説では、近称・中称・遠称ともに「円周内」という術語を用いて定義しているが、これらはそういう同次元のものではなく、いわゆる近称・中称と遠称とは次元の異なるものとみた方が妥当である。不定称についても同様である。

## 2.9 三上章

三上章は、『現代語法新説』（くろしお出版 昭和30年）で、コ系・ソ系・A系の三者の相互関係について、次のようなみかたを示している。（177～178頁）。

相手と話し手との原始的な対立の様式が楕円的である。両者は楕円の二つの焦点に立ち、楕円を折半してめいめいの領分として向い合っている。楕円の外側は問題外である。言換えると、ソレ対コレの立場ではA

第5表

指示代名詞			人称代名詞		
方向	場所	事物	人		さすもの 話しの 手の識別
			僕 わたし	わたし わたくし	話し手
			予 おのれ	われ われ	
			君 おまえ	あなた あなた	聞き手
			汝 そなた	なれ なれ	
こ	こちら	ここ	これ	こいつ このかた	話し手・聞き手以外のもの （各欄とも上は口語、下は文語）
	こなた	ここ	これ	こ	
そ	そちら	そこ	それ	そいつ そのかた	聞き手中心の 円周内
	そなた (そち)	そこ	それ	そ	
あ(か)	あちら	あそこ	あれ	あか あかた	話し手および 聞き手中心の 円周内
	あなた (あち)	あそこ	あれ	あか あかた	
ど	どちら	どこ	なに どれ	どなた どなた	不定(話し手 中心の 円周外)
いづ	いづか いづち	いづこ	なに いづれ	た た	
共通点	た(ち)	こ	れ		

レはまだあられもない。

眼を移すと、二人は差向いから肩を並べる姿勢に変わって接近する。相手と話手とは「我々」としてぐるになり、楕円は円となる。これは心理的な問題として言っているのだから、二人が依然相当な距離を保って向い合っている、話題が手もとの事物に無関係になったら楕円は円に変わる。相手自身は消えることはないが、「ソレ」の領分は没収されてしまう。円内がコレ的で円外がアレ的である。ココカシコ、アチラコチラ、アレかコレか、カレも人なりワレも人なりの内外自他の対立である。(中略)。コレ、ソレ、アレは同一平面を同時的に分割するものではない。ソレ対コレとアレ対コレとは異時的であり、異質的である。

三上は、コ系(三上では「H称」)の中心には「私」がおり、ソ系(三上では「A称」)の中心には「アナタ」がいて、両者ともに「求心的」であるとし、それに対してア系(三上では「他称」)・ド系(三上では「疑問称」)は「離心的」であるとしている。

三上は、上記のような鋭いみかたを示しながら、しかし代名詞の体系は、第6表のように、佐久間とほぼ同じものを示している。

第6表

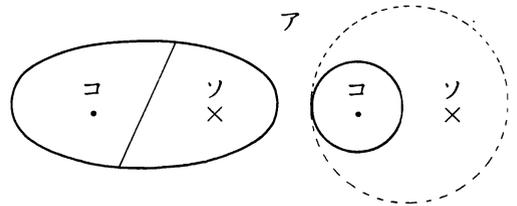
人	方	所	物	称
きおあ みまな えた	ソソ ッチ チラ	ソ コ	ソソ イ レ ツ	A 称 近 称 (求 心的)
ぼおわ くれた し	ココ ッチ チラ	コ コ	コレ イ ツ	H 称 遠 称 (離 心的)
カ レ	アア ッチ チラ	ア ソ コ	アイ レ ツ	他 称 疑 問 称
ダド レナ タ	ドド ッチ チラ	(ド コ)	ドレ イ ツ (何)	

## 2.10 高橋太郎(注2)

高橋太郎は、具体的に存する「話し手」「聞き手」「素材」の緊張関係を「場面」、認識主体がその場면을意識して構成する「自分」「相手」「話材」の緊張関係を「場」と規定して、コソアドにおける意識構造を次のように説く(57頁)。

コソアド系の「場」は(中略)「コ・ソの場」と(中略)「コ・アの場」の二つの緊張関係としてとらえられなければならない。なぜならア系発言は自分と相手とが(近似的にしろ)同じ位置にあることを要するからである。

「コ・ソの場」 「コ・アの場」



## 2.11 井手至(注3)

井手至は、代名詞について、次のような見解を示す(113頁)。

代名詞は、話者との関係概念の表現という主観的な表現と範疇概念の提示という客観的な表現とを二つながら含むことによって、特定の事物・属性を限定して指示することができると考えられるのである。

そして、代名詞の特質をその指示性に認め、次のように述べる(115頁)。

代名詞全般に亘って、その語としての特質を指示性に認めるということは、それを単に話者との関係概念を表現するという表現性のみ認めることよりも、一層適切な見解として許されるであろうと思われる。

代名詞の表わす関係概念の表現については、次のように述べている（116頁）。

代名詞の表わす関係概念は、話し手の意識の場における話し手自身の投影たる話者を基準とする関係の概念的表現である。つまり、話し手が時間的・空間的な限定のもとに聞き手に対立する場面を意識に映し出し出したものが場であるが、そのような場に映し出された話し手自身、すなわち話者との関係を表現したのが代名詞における関係の表現なのである。

その関係表現としては、従来と同じように、自称・対称・他称を認め、次のように定義する（116～119頁）。

自称（第一人称） 話し手が自分自身を、聞き手の場への投影たる聴者に対立する話者として場において把握して表現したもの。

対称（第二人称） 話し手が、言語を取り交わす相手を、場において、話者に対立する聴者の関係においてとらえて表現したもの。

他称（第三人称） 素材たる人や事態が話し手の意識の場に反映されて、話者に対する話材としての関係においてとらえて表現したもの。

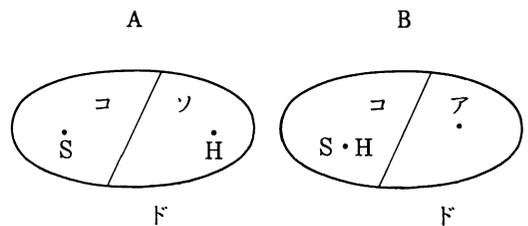
コ系 話し手の意識の場において、話材が話者の勢力圏内のものとして把握せられた場合に用いる。

ソ系 聴者の勢力圏内のものとして把握せられた場合に用いる。

ア系 話者・聴者の勢力圏外のものとして把握せられた場合に用いる。

ド系 以上三者のいずれに属するか話し手が自分で決定できない場合に用いる。

さらに、井手はコソアドの発現は場の構造によって、次のA・Bのいずれかの「限定をうける」ものとしている。



S = 話者 H = 聴者

Aについては、次のように説明する（121頁）。

Aとして示した指示の場は、上図のように、言語の場面における話し手の投影としての話者と、聞き手の投影としての聴者とが対立的に離間し、両者の勢力圏が相覆うことのない場合である。このような場は、話し手と聞き手とが空間的に離れていたり、感情的に疎遠であるような場面に話し手が直面したような場合とか、必ずしも限定されない非特定の相手を読み手（聞き手）として文章が書かれるような場合に、話し手の意識に構成されるものである。このような指示の場のもとにおいては、他称の代名詞のうち、〈コ系〉〈ソ系〉〈ド系〉しか使用できない。

Bについては、次のように説明する（121～122頁）。

Bとして示した指示の場、すなわち、話者と聴者とがまさに相重なり、話者の勢力圏がそのまま聴者の勢力圏であると意識されて構成された場のもとにおいては、他称の代名詞のうち、〈コ系〉〈ア系〉〈ド系〉しか使用されない。しかも、この場合の〈ド系〉の代名詞は、聞き手に対する疑問としてではなく、話し手自身に対する懐疑不定の気持として表現されるのであって、Aの場において、〈ド系〉が話し手に時間的・空間的に対立する他者としての聞き手に対する疑問・質問としてでも表現され得ると相違する。このようなBの場は、近似的には、空間的に話し手に非常に近く聞き手が位置して並列的に他者に対したり、あるいは恋人同志のように感情的に非常に親密であって互いに一体となって他者に対したりするような場合における言語の場面の、話し手の意識への投影としても考えられるが、まさにBの場に相当するものとしては、話し手が自分自身に言い聞かせる独語、また言語のかたちでは発せられない内語、沈黙考する思考のことばを成立せしめる場として存在する。つまり、これらの場合には、聴者は話し手自身であってそれ以外の何者でもないのである。

井手は、話し手における以上のようなA・Bの意識構造を示した。そして、Bの説明において、「他称の代名詞のうち、〈コ系〉〈ア系〉〈ド系〉しか使用されない」としたが、しかし次の例のように、ソ系が用いられるものもある。

アイツヲ呼ンデ来テ、ソイツ（つまりアイツ）ニヤラセテミルカ？

これは三上章が文脈指示でとりあげた例であるが（注4）、これに対して、三上は「これは

ひとりごととしても成立つ言方であり、相手に向って言うにしても、その相手は単なる聞役であって発言内容には交渉をもたない。」と述べている。いわゆるBの場で用いられたものである。三上は、この「ソイツ」を「指示代名詞が方向を失い、従って指示作用を失って、文脈承前のはたらきをするようになった」もので、「中立中和の中称」化した語とみているが、ソ系がそのような用法をもつ基底には、また、次のような意識構造があるのではなからうか。すなわち、Bの場合においては、発言者と聴者とが一体化して成立した異次元の発言者があり、それと話し手が想定した異次元での想定上の聴者とが対立しているが、上記用例における「ソイツ」は、話し手が異次元の発言者の心的領域に属するものと認めての表現だとも解せられるのである。このような意識構造をもとにして、文脈承前のはたらきもあらわれてくるものと解される。

その他、A・Bの図を問題にすれば、いくぶん訂正したいところもあるが、しかし、コソアは意識においては二極構造をなしているというそのみかたは妥当であると解する。

井手は以上のように、コソアにおいて二極構造を見出しながら、しかし、コ系・ソ系・ア系・ド系の定義においては、通説をほとんどそのまま踏襲している。そして、代名詞の体系も第7表のように、時枝文法のそれを少し訂正した形で示している（116頁）。

これからもわかるように、せっかくコソアで二極構造を説きながら、それが体系表に反映されていないことになる。すなわち、井手説ではA・Bの図式で示した構造は、代名詞の本質的な構造とはみなされていないことになる。

第7表

指示代名詞					人代名詞			
連体詞的	形容動詞的	副詞的	名詞的					
ことの	情態	方角	場所	事物	人	範疇 ／ 関係		
					オボワ レクワ タシク シ	自称		
					オキミ マエ ア ナタ	対称		
コノ	コンナダ	コウ	コッチ コチラ	ココ (コレ)	コイツ (カレ・カノ ジヨ)	コノカタ ソノカタ	近称	
ソノ	ソナダ	ソウ	ソッチ ソチラ	ソコ (ソレ)	ソイツ	ソノカタ アノカタ	中称	
アノ	アナダ	アア	アッチ アチラ	アソコ (アレ)	アイツ	アノカタ	遠称	
ドノ	ドンナダ	ドウ	ドッチ ドチラ	ドコ (ドレ)	ドイツ	ドノカタ ドナタ	不定称	
〈コノの類〉 〈コンナダの類〉 〈コウの類〉 〈コッチの類〉 〈ココの類〉 〈コレの類〉 〈ソレの類〉							本文 略 引用	

## 2.12 池上秋彦（注5）

池上秋彦は、近称・中称・遠称・不定称について、次のようにみている（34～35頁）。

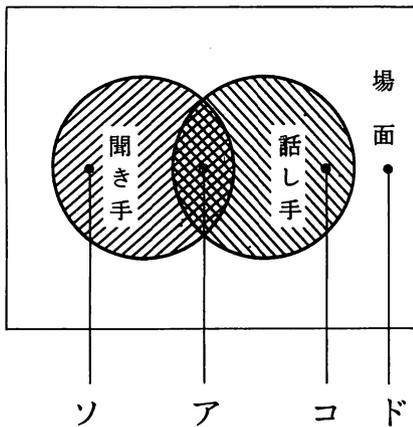
近称 事柄が、話し手を中心とする円周内にあると意識した場合。

中称 事柄が、聞き手を中心とする円周内にあると意識した場合。

遠称 事柄が、話し手を中心とする円周と聞き手を中心とする円周との重なり合う部分にあると意識した場合。

不定称 事柄が、話し手を中心とする円周と聞き手を中心とする円周のどちらに属するのか、いまのところはつきりしていない、と意識した場合。

そして、次のように図示する。これは阪倉説にもとづきつつ、遠称・不定称を多少定義しなおしたものである。



## 2.13 岡村和江（注6）

岡村和江は、代名詞の本質を、その「指示作用」に求め、その本質（指示作用）から代名詞の意義上の特色、すなわち「関係概念と範疇概念」および「体系」性があるものとみて

いる（81～89頁）。

「関係概念と範疇概念」については、次のように述べている（81頁）。

いわゆる「代名詞」の意義上の特色の一つは、これらのことばが、話し手がそれについて表現しようとするものとすなわち「素材」と、話し手と意識している「自分」との関係のしかた、つまり自分と素材とにおけるいろいろな関係の概念を表現する。（中略）。そして通常はこの関係概念とともに、客体として存在するいっさいのものごと、すなわちことばの素材となりうるものを、人・事柄・場所・方向・状態のように範疇化してとらえ、こうした大まかな対象の質の差の概念すなわち範疇的概念をもあわせて表現するという特色である。

「体系」性については、高橋太郎の「場」の概念を援用して、次のようにみている（81～83頁）。

- 1) 「場」を土台として、自分と素材との関係が定まっているか、不定である（不定称）かの二つに大きく分けられる。
- 2) 定まっている関係すなわち定関係はさらに、自称（一人称）・対称（二人称）・他称に分けられる。
- 3) 他称は素材が「自分および相手にどう所属していると認めるか、すなわち自分と相手とがもつ心理的ななわばりのそれぞれに、表現素材である人やものごとをどう位置づけるかによって」コ・ソ・アの区別すなわち近称・中称・遠称の体系をなす。他称は、また範疇概念からみれば、「人」を表わすものと「それ以外」のものとのに区別される。
- 4) 自称・対称・他称・不定称は同列に並ぶものではなく、自称・対称をもとにして他称が

成立し、また、不定称は、自称・対称・他称の区別を前提として、自称・対称と他称とのそれぞれに否定的に対立するという、いわば立体的な構造をなしている。

そして、「話し手は素材を指示の場の三定点（筆者注、自分・相手・第三者）もしくは三つのなわばり（筆者注、コ・ソ・アの各なわばり）の内に投影し分け、話材化する」とし、各称格について、次のように述べている（101～106頁）。

自称 自分の点に投影される話材の表現。

対称 相手の点に投影される話材の表現。

他称 ① 第一類 話題の人物が第三者の点に投影され話材化された表現。

② 第二類 自分・相手の所属関係としてコ・ソ・アのなわばりに投影し分けられる話材の表現。

近称（コのみ）  
話し手として意識している自分の占める一種の心理的領域。

中称（ソのみ）  
自分の表現に何らかの制約を与える相手として意識されたものもつ勢力範囲として、話し手の認めた領域。

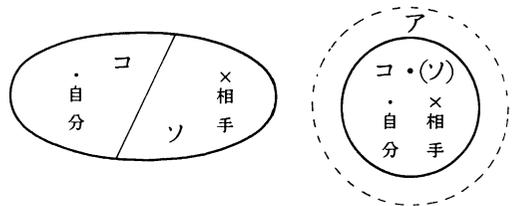
遠称（アのみ）  
話し手が、自分も相手もお互いに知っているあるいはお互いに知覚できると考えるもう一つの領域。

不定称 話し手とは関係のしかたが不定な素材を、範疇概念でとらえて不定のまま投影させるもう一つの意識の場があり、その場に話材化されたものの表現（114頁）。

また、なわばり相互の関係については、話し手のその時の意識しだいで、下図のような、二つの緊張関係のどちらかとなるとしている。（102頁）。

(一)

(二)



(一)の図については、次のように述べている。

- 1) 楕円形を二つに分かって、境を接してコ・ソが対立する緊張関係。
- 2) (一)は話し手が聞き手と空間的にかなり離れていたり（客観的な距離の基準はない。とにかく話し手が、自分と相手とは共通の立場に立つことができないと思うほどの距離である）、聞き手と感情的に疎遠だったりするときである。不特定の聞き手（読み手）を相手として文章を書くときも、ほとんどそうである。こういう場合、話し手は、聞き手との間の諒解上にあると認めるなまなわばりを構成できない。すなわちアのみは成立しない。

(二)の図については、次のように述べている。

- 1) コがソに近づいて重なり合い、ソのみが意識されず、コ・アが対立する緊張関係。
- 2) (二)は話し手が聞き手と空間的にきわめて接

近し、相並んでほかのいっさいのものごとに対してしていると感じ、意識的には一体化していたり、聞き手と感情的にきわめて親密で一体化していたりするときである。

このように、次元の異なる二極からなるなわばりについて述べ、さらに「発言の場でのコ・ソ・アの関係はこの二つしか成立せず、三なわばりは同時的には決して共存しない」(103頁)

としながらも、なお、「三なわばり」というものにこだわって、最後の結論では、やはり平面的な三なわばり説になってしまっている。そして、代名詞の体系も第8表のように、平面的な体系表となっている。

結局、岡村論でも代名詞における二極構造は、体系表に少しも反映されていないのである。

第8表

ナシ	状態		方角	場所	物事	人	範疇		関係
							自	対	
						ぼわたくし	わたたくし	自称	定
						きおまみ	あなた	対称	
この	こうこうな しいたう	こう	こちちら	ここ	こい(こ) つれ	ここの つひか とた	かれ	近称	他称
その	そそん しいたう	そ	そちちら	そこ	そい(そ) つれ	そこの つひか とた	かのじよ	中称	
あの	ああんな しいたう	あ	あちちら	あそこ	あ(あ) い(あ) つれ	ああの つひか とた	やつ	遠称	
どの	どどうん しいたう	ど	どちちら	(ど) ここ	どい(ど) つれ	どい(ど) つれ	ど(だ) なた(れ)	不定称	
	連体詞的	副詞的			名詞的				の構 特文 徴上

2.14 大野晋

大野晋は、『日本語の文法を考える』(岩波、昭和53年)において、コ系・ソ系・ア系について、次のように述べている(73~80頁)。

コ系 話し手が自分のウチとみなすところを指す。

ソ系 「我」と「汝」とがすでに知っている

るものを指す。

ア系 ウチという輪の外のものを指す。

また、人称代名詞「我」(一人称)と「汝」(二人称)の関係については、「我」と「汝」とは、本来意見不一致な存在、利害相反する存在ととらえるよりも、「く我」とく汝」とは基本的に共同の場で生きており、同じ感覚をもって事態に対処してゆくウチなる存在ととらえる。だから共に生活し、行動する相手をなるべく傷つけまいとする」(77頁)とし、そのために、日本語には、一人称と二人称の転用がよくみられると述べている。

代名詞をウチ(コ系)とソト(ア系)の二極構造でとらえたことは卓説であったが、しかし、この構造で代名詞全体を体系化するまでにはいたっていない。また、ソ系はウチなるものを指すのか、ソトなるものを指すのか、今一つ明らかでない。

さらに、人称代名詞における一人称と二人称についての考察は、まさにその通りだと納得のいくものであるが、しかし、これが代名詞全体の構造とどうかかわるのかということについての言及はほとんどなされていない。

### 3. 代名詞の問題点

以上、これまでの代名詞論を概観してきて、代名詞についての問題点をまとめてみると、以下のようなになる。

#### 1) 代名詞の本質について

まず、代名詞の本質または特質をどうとらえるかを、大きくまとめてみると、次の二つに分けられる。

- a 指示説 指示のはたらきを本質とみて、発言者との関係概念を表わすはたらきは、その本質のあらわれの結果

とみる説。

- b 関係概念説 発言者との関係概念を表わすことが本質で、指示のはたらきは、その本質のあらわれの結果とみる説。

指示説は安田・佐久間・松下・山田・井手・岡村などの各説がこれに属する。もちろん、指示説は、代名詞の特質を「指示」一点に求めるものではない。たとえば、安田説は、代名詞の本質を「指示」とみているが、どちらかといえ、その指示作用は、代名詞の外形上のはたらきととらえ、その作用の「心的作用」はいかなるものであるかということ、話し手の意識の面も説かれている。いわば、代名詞の特質を外形と内面から説いているが、究極的には、「代名詞は、体言中、ものを指す語であると言えはる」として、その特質を外形的なはたらきに求めたといえよう。佐久間説も指示のはたらきをまず第一にすえ、しかるのちに、その心理面をより明らかにしたといえる。

指示説が、代名詞の特質を外形面に求めたのに対し、関係概念説は、それを内面、すなわち話し手の意識面に求めたものであるということができよう。橋本・時枝・阪倉の各説などがそれに属する。橋本では、代名詞は、「話手を基点として見た、これ等のものに対する関係に基いて(筆者傍点)」事物を指すとしている。「基いて」というのは基盤としてということであろう。時枝・阪倉説では、その「関係概念」ということが、代名詞の特質として、より前面に出てくる。

代名詞の特質または本質に関しては、現在上記二つの説が対立しているといえよう。

#### 2) 代名詞の下位分類

次に、代名詞をその指す内容によって、いわ

ゆる人称代名詞と指示代名詞に下位分類するか否かの問題がある。

a 分ける説 大槻 松下 佐久間

b 分けない説 上記以外の説

分ける説は、まず、指す内容によって、代名詞を人称代名詞（または人代名詞）と指示代名詞に分ける。次に、発言者を中心にしてみた他者との関係のしかた、つまり称格に基いて、人称代名詞には自称・対称・他称・不定称、指示代名詞には近称・中称・遠称・不定称を認めてそれぞれ別個に体系化する。その中で、佐久間説では、さらに両者の内面的交渉を心理的側面から説いたわけである。

分けない説では、人称代名詞と指示代名詞を分けることをせず、称格に基いて体系化する。すなわち、発言者を中心にして、他者とのかわりを、話し手がどう認識しているかという、その意識構造に基いて体系化しようとする。そこで、称格としては、自称・対称・他称・不定称を認め、他称はさらに近称・中称・遠称に分けられるとする。しかる後に、指される内容によって、人・事物・場所・方向等に分け、いわゆる指示代名詞といわれるものは、他称と不定称に位置づけられるとみる（ただし、三上説では称格の認め方は多少異なる）。分けない説では、人も事物も場所も方向も、関係づけられる対象ということにおいては同じであるとみるところが分ける説と異なる。ただ、橋本説は、理論的には分けない説に立ちながら、体系を示すにあたっては分ける説の方法をとっている。

### 3) 称格について

代名詞で一番問題なのは称格である。これは、話し手の意識と深く関連するが故に、そのとらえ方も説によって微妙に異なってくる。

さて、称格の中で、自称は、話し手が自分自

身をその場における発言者という関係でとらえた表現であり、対称は、話し手が他者をその場における発言者に対立する聴者という関係でとらえた表現であるとみるのは、各説ほぼ一致する。

問題は、コソアドである。まず、コソアについてみることにする。

コソアについての説の発展過程をみると、次のようになる。

#### a 三極関係構造説

三極関係構造説は、さらに(イ)遠近関係説と(ロ)三なわばり説とに分けることができる。

##### イ) 遠近関係説

これは、話し手を中心にして、それとの遠近関係（時間的・空間的・精神的）で、指されるものが三つの称格に分けられて把握され、表現されているとみる説である。話し手を中心にして、それとの遠近関係ということを確認にうち出したのは安田説で、以下、松下・山田・橋本・時枝の各説もこれによっている。時枝説で例示すると、次のようになる。

近称（コ系） 話し手に近い関係にあるものを指す。

中称（ソ系） 聞き手に近い関係にあるものを指す。

遠称（ア系） 話し手・聞き手に対して第三者的關係にあるものを指す。

##### ロ) 三なわばり説

これは、話し手を中心にして、それとのなわばり関係で、指されるものが三つの称格に分けられて把握され、表現されているとみる説である。これは、佐久間説に発し、阪倉説でさらに発展して、現在にいたっている。阪倉説で例示すると、次の通りである。

近称（コ系） 話し手自身を中心とする円周内

に含められるものと認定しての表現。

中称(ソ系) 聞き手を中心とする円周内に含まれるものと認めての表現。

遠称(ア系) 話し手・聞き手を同時に中心にするような、大円周内の中に含まれたものと認めての表現。話し手・聞き手にとって共に了解されているものを指す。

ここでいう円周とは、一種のなわばりを表わしている。

なお、遠称については、「話者・聴者の勢力圏外のものとして把握せられた場合に用いる」(井手説)とか、「話し手を中心とする円周と聞き手を中心とする円周との重なり合う部分にあると意識した場合に用いる」(池上説)などと、説によって多少異なりを示す。

#### b 二極関係構造説

二極関係構造説は、さらに(イ)二なわばり説と(ロ)ウチ・ソト説に分けることができる。

##### イ) 二なわばり説

これは、話し手の意識に即してみるならば、コソアの相互関係は、〈コ対ソ〉の対立関係か、あるいはそれと次元を異にする〈コ対ア〉の対立関係しか成立しえないとみる説である。すなわち、二つのなわばりの対立関係、あるいは二つの称格の対立関係とみる説である。

これは、三上説にはじまって、高橋・井手・岡村の各論に引継がれてきている。ただし、井手・岡村論では、また三なわばり説も認め、代名詞の体系はこれに基いて示している。両論では、三なわばり説と二なわばり説がどうかかわりあうのか、今ひとつ明確でない。

##### ロ) ウチ・ソト説

これは、コソアを近称・中称・遠称でとらえ

る従来の三極関係構造説に対して疑問を提示し、むしろコ系はウチ、ア系はソトを表わすとみてウチ・ソト意識で説くものである。これも概して言えば、二なわばり説、または二称格説に属するものである。大野説がこれであるが、大野説では、ソ系がウチなのかソトなのか、あるいはウチ・ソト関係でソ系はどう位置づけられるのか、今ひとつ明らかでない。また、大野説では、ウチ・ソト関係で代名詞全体を体系づけるまでにいたっていない。

次に、コソアドのドについてみることにする。

ド系は、それによって指されるものが不定で、不定であるが故に、発言者との関係も不定であるという点においては、各説ほぼ一致すると解されるが、そのド系を体系の中でどう位置づけるかということになると、説によって異なる。

以下、ド系(不定称)の位置づけについてみてみよう。

イ) 称格を、まず自称・対称・他称に分け、他称を定称(近称・中称・遠称)と不定称に分ける説……安田, 山田

ロ) 称格を、自称・対称・他称・不定称に分ける説……佐久間

ハ) 称格を自称・対称・他称に分け、他称を近称・中称・遠称・不定称に分ける説……橋本, 時枝, 阪倉, 井手

ニ) 自称・対称・他称(近称・中称・遠称)を定称とし、それに対して不定称をたてる説……岡村

以上のように、従来のコソアドにはいろいろ問題があるが、コソアドの構造をどうとらえるかによって、また自称・対称のとらえ方も異なってくる。

その他に、代名詞を一つの品詞として認めるか否か、あるいはいかなる語を代名詞とするか

などについても各説みかたを異にしている。

以下、これらの問題点、とりわけ称格の問題を中心に代名詞について考察してみたい。

#### 4. 問題点に対する考察

##### 1) 代名詞の本質

既に述べたように、代名詞の本質について、従来は指示説（指示のはたらきを本質とみる説）と関係概念説（発言者との関係概念を表わすはたらきを本質とみる説）とがあり、定説をみない。一方、全く白紙の立場に立ち返って、上記以外のところに、その本質を求めることができるかといえ、今のところその可能性はない。

では、指示説と関係概念説とでは、どちらがより代名詞の本質を言いあてているかといえ、どちらもその特質をついてはいるが、本質となると、後者すなわち発言者との関係概念を表わす語とみた方が妥当であろう。

代名詞の特質は、機能の面（外面的）と話し手の意識の面（内面的）から取り出すことができるであろう。機能の面からみれば、やはり「指示のはたらき」がその特質であろう。時には、なんらかの仕草、たとえば指先や眼差しなどを伴って、事柄を称格に位置づけて、より限定的に表現するはたらきは、代名詞特有のものである。

一方、話し手の意識の面からみれば、代名詞は、発言者を中心として、発言者と他者とがどうかかわるのか、そのかかわり方の相違を識別し、概念化して表現する語であるといえることができる。その関係を識別し、概念化したものが称格である。

では、二つの特質のうち、どちらが代名詞の本質であるかといえ、後者であろう。発言者を中心として、他者との関係の相違を概念化し

表限する結果、指示のはたらきもあらわれるものと解する。そのみかたは、代名詞を称格によって体系づける基盤ともなる。

##### 2) 人称代名詞と指示代名詞について

代名詞を人称代名詞と指示代名詞に大別するか否かの問題であるが、これは、代名詞の本質をどうとらえるかということとも深くかかわっている。代名詞の本質を、発言者を中心としてこれと他者との関係のしかたを表現する語とみるならば、話し手がその関係をどう把握し、識別しているのかということ、まずもって明らかにせねばならない。代名詞は話し手の意識をはなれては考察することができない。関係づけられる他者は、それが人であろうが、事物・場所・方向等であろうが、話し手側からみれば、等しく関係づけられる対象である。対象との関係における話し手の意識を明らかにした後に、その対象にどんな種類のものがあるかを示すことは有効である。しかし、代名詞の本質からみれば、指される対象を、特に人を表わすものとそれ以外のものに分ける理由はみつからない。

##### 3) 称格について

これまでも、ことわりなしに「発言者」「聴者」という術語を、必要に応じて用いてきたが本稿では、高橋太郎・井手至両説を参考にしつつも、両説の定義とは多少異なって、次のように規定して用いることにする。すなわち、具体的に存するのは、「話し手とその心的領域に属すると認められる素材」と「聞き手とその心的領域に属すると認められる素材」とのはりあい関係で、これを「場面」とする。そして、この場面を反映して、話し手の意識内に構成される「発言者とその心的領域内に属すると認められる話材」と「聴者とその心的領域内に属すると

認められる話材」とのはりあい関係を「場」とする。

さて、称格とは、発言者を中心として、それと他者との関係について、話し手はその関係のありかたを識別し、概念化して表現した表現差のことである。従って、称格と話し手の意識とは密接な関係がある。

ところで、コソアは従来、称格としては、近称・中称・遠称であるとみなされてきた。たとえば、時枝説などは、その定義からしても近・中・遠の三極関係構造説である。阪倉説などはその遠称の定義からみれば、多少二極関係構造観の芽生えがみられるが、しかし体系は以前として三極構造説に基いている。三上説以来、二極構造観ははっきりとしたかたちをとってあらわれ、大野説では、これまでの近・中・遠の三極構造説に疑問を提示しながらも、それが代名詞の体系とどうかかわるのかということになると、今ひとつ明らかでなかった。

結論を述べると、代名詞の称格は、やはり自他の二極関係構造であろうと考える。話し手が発言者と他者との関係をとらえるとき、自他の二極関係構造でとらえるものと解される。その自他の認識構造は、平面的・固定的なものではなく、重層的・流動的である。発言者を中心にして構成される〈自〉の心的領域は、彼我一体意識の支配する場であり、その領域に含まれるものは、人であろうが、物であろうが、すべて一体化意識でとらえられてしまう。その〈自〉の領域の限界は固定的でなく、発言者1人に限定される場合もあるが、状況によっては、発言者を中心として、家族あるいは隣近所、村全体、国全体が〈自〉の領域としてとらえられる場合もある(注7)。このように、自他の領域は固定的でなく、流動的である。

以下、自他の二極関係構造に基いて、代名詞を体系化する。

## 5. 代名詞の体系

代名詞の体系を示すと、第9表の通りとなる。

### 1) 範疇

話し手が認識する範疇は、〈対話者(発言者・聴者)〉と〈話材〉とから構成されている。対話者はもちろん人であるが、話材はさらに人・事物・場所・方向・状態・関係に分けることができる。

### 2) 称格

称格は、これまでも述べてきたように、話し手が、自分自身の投影たる発言者を中心として、それと他者との間に構成される種々の心的領域のはりあい関係を概念化し、表現したものである。心的領域のはりあい関係は、次元を異にして別種のもものが形成されるが、どの次元においても、基本的には自他の二極関係構造をなすものと解される。

以下、具体的に称格について述べる。

#### a 自称(自1)と対称(他1)の対立〈一次的場の構造〉

自称は、話し手が範疇において、〈自〉とみなす心的領域のことである。この〈自〉をほかの〈自〉と区別して〈自1〉としておく。自称の心的領域の中心は、対話者の一方である〈発言者〉である。換言すれば、発言者とそれを中心とする心的領域が自称(自1)である。その中で、発言者とは、話し手が自分自身を、自称の領域へ、聞き手に対立する話し手として投影したものの表現である。また、コ系は、発言者を中心とする心的領域に含まれるものと認められた話材の表現である。話材はまた、それぞれの範疇に位置づけられて表現される。

第9表 代名詞の体系

関係	状態		方向	場所	事物	人		話材	人	対話者	範疇		称格	
	この	こんな				この	この				この	この		この
	この	こんな	こう	こちら	ここ	こいつ	(このかた) こいつ	かれ	コ系	おぼわたくし れく	発言者	自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)
	その	そんな	そう	そちら	そこ	そいつ	(そのかた) そいつ	かのじよ	ソ系	おまきあ えみ	聴者	対称(他1)		
	あの	あんな	ああ	あちら	あそこ	あいつ	(あのかた) あいつ	やつ	ア系			遠称(他2)		
	どの	どんな	どう	どちら	どこ	どどど どいつ、どっち	(どのかた) どどど		ド系					不定称(他3)
	連体詞	形容動詞語幹	副詞	名詞						品詞				

対称は、話し手が範疇において、自称に対して〈他〉とみなす心的領域のことである。この〈他〉をほかの〈他〉と区別して〈他1〉としておく。対称の心的領域の中心は、対話者の他方である〈聴者〉である。いわゆる聴者とそれを中心とする心的領域が対称(他1)である。その中で、聴者とは、話し手が他者を、対称の領域へ、話し手に対立する聞き手として投影したものの表現である。また、ソ系は、聴者を中心とする心的領域に含まれるものと認められた

話材の表現である。そこにおける話材もそれぞれの範疇に位置づけられて表現される。

以上のように、称格には、まず自称(自1)と対称(他1)の対立構造がみられる。これが発言における〈一次的場〉である。

b 近称(自2)と遠称(他2)の対立〈二次的場の構造〉

自称と対称の対立関係とは次元を異にして、状況によっては、近称(自2)と遠称(他2)の対立関係も見出される。

近称は、話し手が、発言者とそれを中心とする心的領域と聴者とそれを中心とする心的領域を一体化してとらえ、それを〈自〉とみなした心的領域のことである。すなわち、自称と対称とを一体化したものととしてとらえ、それを〈自〉とみなした心的領域のことである。その領域においては、聴者は他者としての位置づけはなされず、発言者と心的に一体化し、同化して、ともに別の他者に対立する〈自〉なるものとしての取扱いを受ける。それとともに、発言者を中心とする心的領域と聴者を中心とする心的領域も対立を失なって、両者が重なり合い、発言者・聴者を同時に中心とするような、より広い心的領域を形成する。すなわち、発言者と聴者とは一体化して、異次元での近称における〈発言者〉となる。近称における発言者は、「われわれ」「私たち」などで表わされる場合が多い。この異次元の発言者を中心とする心的領域に含まれると認められた話材は、それぞれの範疇に位置づけられて、コ系かソ系の語で表わされる。

近称は、いわば発言者と聴者とが一体化して成立した異次元の発言者を中心とする心的領域のことである。ここでは、この〈自〉を〈自1〉と区別して〈自2〉としておいた。

次に、遠称は、話し手が近称(自2)に対して〈他〉とみなす心的領域のことである。これを〈他1〉と区別して〈他2〉としておく。遠称の中心には、近称の中心である異次元の発言者に対立する異次元での聴者たるべき他者が存在するはずであるが、具体的にはそういうものは存在しない。しかし、具体的には存在しなくても、話し手は、異次元の発言者に対立する異次元の聴者を想定している。その聴者は、異次元の発言者を鏡に映したようなもので、異次元の発言者そのものが対象化され、他者化されて

とらえられているものと解される。ただし、それはあくまでも想定上の聴者であるが故に、それを表わす語は存しない(従って、遠称の対話者のところは、体系表でも空白となっている)。相対する者が想定上の聴者であるが故に、それへ向けて発せられることばは、答えを期待しないもので、その結果、たとえば「あれは楽しかったなあ」のようなひとり言か、あるいは詠嘆調のことばとなってあらわれる場合が多い。

この想定上の聴者を中心とする心的領域に含まれると認められた話材は、それぞれの範疇に位置づけられて、ア系の語で表わされる。

遠称は、いわば想定上の聴者を中心とする心的領域のことである。

さて、想定上の聴者とは、既に述べたように異次元の発言者の対象化または他者化されたもので、これからすれば、想定上の聴者は異次元の発言者以外のなにものでもない。そうすると、異次元の発言者を中心とする心的領域、すなわち近称と、想定上の聴者を中心とする心的領域すなわち遠称とは区別がつきにくいように思われる。しかし、近称と遠称は、やはり区別がある。たとえば、近称のコ系やソ系で指されるものは、現実に、具体的に確認できるものやことである場合が多い。極端にいえば、ふれてその存在を確かめようとすれば、可能なものやことである場合が多い。

それらの夏の日々、一面に薄<sup>うす</sup>の生ひ茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いてみると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだった。(堀辰雄『風立ちぬ』)(注8)

この文において、「それら」によって指される「夏の日々」は、「私」(作者)と「お前」にとって、現実に、具体的に確かめることので

きる「日々」である。また、そう表現することによって現実感を与えたものとも解される。あるいはまた、そう表現することによって、読者をただちに現実の小説の舞台に引き入れていく手法とも解される。

これに対して、遠称のア系で指されるものは、現実には、具体的に確認できるものやことである場合もあるが、また、かつて発言者や聴者がともに経験したのものやことなどが、概念化され、抽象化されて、概念の世界でしか確認できないようなものやことである場合も多い。いわゆるふれてその存在を確かめることがほとんどできない場合が多い。いわば、遠称の領域は、話し手が、発言者も聴者もともに知っていると思われるような概念の世界にまで広まっていることになる。「あれ、どうなった？」と聞くと、「ああ、あれうまくいったよ」と答えただけで、十分コミュニケーションが成立するのは、発言者・聴者両方にとって、「あれ」によって指される内容が、たとえ眼前に確認できなくても、よく了解されているためだと考えられる。逆に、「あれって、なんだい？」と問い返されたりする場合は、話し手の聴者把握に間違いがあったことを意味する。

以上のように、自称と対称の対立とは次元を異にして、近称（自2）と遠称（他2）の対立構造がみられるが、これは先の〈一次的場〉に対して〈二次的場〉と称することができよう。

#### c. 定称（自3）と不定称（他3）の対立〈三次的場の構造〉

自称と対称、近称と遠称の対立関係とは、さらに次元を異にして、ある状況においては、定称（自3）と不定称（他3）の対立関係も考えられる。

定称は、話し手が、指す内容を判別しうるよ

うな領域、その領域を〈自〉とみなしたものである。この〈自〉を、〈自1〉〈自2〉に対して、〈自3〉としておく。

自称や対称、あるいは近称や遠称は、すべて定称であるが、中にはこのような称格を越えて純粹に定称に位置づく認められる語がある。これは「かれ」「かのじよ」などである。

この両語は、次のように用いられる。たとえば、発言者を中心とする心的領域（自称）に属すると認められる人を指して、「彼が案内します」「彼女が代わりに行きます」ということができる。また、聴者を中心とする心的領域（対称）に属すると認められる人を指して、「彼は弟さんですか」「彼女を紹介して下さい」ということができる。さらに、発言者と聴者が一体化して成立した異次元の発言者を中心とする心的領域（近称）に属すると認められる人を指して、「彼と彼女も一緒につれていこう」と表現することができるし、また、想定上の聴者を中心とする心的領域（遠称）に属すると認められる人を指して、「彼と彼女はこのことについて全く知らないだろうなあ」と表現することができる。

このように、「かれ」「かのじよ」は、自称・対称・近称・遠称のどちらにも位置づけて用いられるという点で、これらの称格を越えた語であると解される。

次に、不定称は、話し手が指す内容を判別しえないような領域、その領域を〈他〉とみなしたものである。この〈他〉を、〈他1〉〈他2〉に対して、〈他3〉としておく。

不定称も、自称・対称・近称・遠称の称格を越えたものである。これは、不定称の語が、これらの称格のどちらにも位置づけて用いられるというところからわかる。たとえば、自称に位

置づけて「これとこれどっちにしようかなあ」といえる。「これとこれ」が発言者を中心とする心的領域に属すると把握されているが、どちらにしてよいか、話し手に判別がつかないだけである。また、対称に位置づけて、「それとそれはどっちがいいの?」といえる。「それとそれ」が聴者を中心とする心的領域に属すると把握されているが、どちらがいいのか、話し手に判別がつかないのである。さらに、近称に位置づけて、「あそこへ持って行くのは、これらのうちどっちにしようか?」ともいえるし、遠称に位置づけて、「あれはどうなったかなあ」ともいえる。いずれも、話し手において指す内容を判別しえないことを表わす。しかし、自称・対称・近称・遠称を越えた語であるという点では、定称の「かれ」「かのじょ」と性格を同じくする。

下系には、さらに次のような特徴もある。すなわち、話し手が指す内容を判別しえないところから、その判別を他者の判断にゆだねるという形をとる。その判断をゆだねる他者は、聴者(他1)か想定上の聴者(他2)である。聴者(他1)にその判別を求めた時は、話し手側でなんらかの答えが期待されているが、想定上の聴者に求めた時は、話し手の「懐疑不定の気持が表現される」(注9)ことになる。

このように、定称と不定称は、話し手側において、指す内容が判別しうるか否かで対立している。これは、既述の〈一次的場〉〈二次的場〉に対して〈三次的場〉と称することができよう。なお、定称と不定称の対立関係も代名詞の称格といえるかどうかについては、後述する。

### 3) 近称(自2)の特徴

近称は、既に述べたように、話し手が、発言者とそれを中心とする心的領域(自称)と聴者

とそれを中心とする心的領域(対称)を一体化してとらえ、それを〈自〉とみなした心的領域のことである。その領域では、聴者は他者としての取扱いを受けず、発言者と心的に一体化し、同化して、ともに別の他者に対する〈自〉なるものとしての取扱いを受ける。

このような心的領域が、一次的場である自称と対称の対立構造のうえにおかぶさっているために、自称と対称の対立関係にも微妙な影響を与えることになる。これは、たとえば発言者を表わす代名詞と聴者を表わす代名詞とは厳然と区別されて用いられているが、なおかつ状況によっては、互いに転用されるという現象となってあらわれる。

万葉集(注10)においては、発言者を表わす代名詞が聴者を表わすのに用いられている例として、次のようなものがある。

4420 草枕旅の丸寝の紐絶えば  
吾が手と付けろこれの針持し

大意：草を枕の旅の丸寝をして紐が切れたらば、自分の手でおつけなさい。  
この針で。

「吾」は発言者を表わす代名詞だからといってこの歌での「吾が手」を「わたくしの手」と解すると、歌の意がおかしくなる。この「吾」はどうしても「自分」あるいは「あなた」の意に解さなければならない。

また、次の例では、聴者を表わす代名詞が発言者を表わす代名詞として用いられている。

3458 吾背の子や等里の岡道し中だをれ  
吾を哭し泣くよ息衝くまでに

大意：わが背子は、等里の岡道の中途のタワのように、このごろ気持が中だるみで、私は泣けてしまいます。  
こんなに溜息をつくまでも。

「な」は聴者を表わす代名詞であるが、しかし、この歌での「な」を「あなた」の意に解することはできない。「なせの子」は「わが背子」でなければ意をなさない。

中古以降では、「われ」が聴者をも表わすようになり、現代関西方言では「わりゃー」となって、相手を卑下する意で用いられている。

このような転用は、やはり自称・対称の対立構造とともに、なおかつ、その対立を包括する心的領域（近称）の存在を考えないと説明のつかない現象である。

また、現代では、親族名称や地位名称なども代名詞的に用いられるが（注11）、これは、理論的にはどうということかといえ、これらの語が近称でよく用いられるからであると説明できる。たとえば、娘「おかあさん（アナタ）、これ読んでどう思う？」、母「おかあさん（ワタクシ）も同じように感じたわ」などの会話は、母と娘が一体化し、母が娘の立場から自分をとらえて、「おかあさん」と称したものと解される。このような用法は、近称でなければできないものである。

次の例でも、娘と母が一体化し、今度は娘が母の立場から自分をとらえて表現したものである。母「理恵、久恵、何にする？」。理恵「理恵はコーヒにする」。久恵「久恵はミルクでいわ」

このように、近称では発言者と聴者とは対立関係になく、両者は一体化意識でとらえられるために、発言者と聴者の区別も明確になされず、そのために発言者を表わす代名詞と聴者を表わす代名詞の相互転用現象もあらわれるものと解される。

## 6 定称と不定称における問題

以上、代名詞の体系について述べてきたが、ここで、定称に位置づくものとみた「かれ」「かのじょ」と不定称のド系の語について、これらがほかのコソアの語とは多少性格を異にするものであるということについて述べてみたい。

ある語を代名詞と認めるか否かは、代名詞の本質をどうとらえるかということと深くかかわっている。本稿では、代名詞を、話し手が、発言者を中心として、それと他者との間に構成される種々の心的領域のほりあい関係を把握し、概念化して表現する語ととらえた。

その心的領域のほりあい関係、すなわち称格についてみると、まず、自称と対称のほりあい関係が見出される。自称は、発言者を中心とする心的領域、対称は聴者を中心とする心的領域である。次に、近称と遠称のほりあい関係が見出される。近称は、異次元の発言者を中心とする心的領域、遠称は、想定上の聴者を中心とする心的領域である。これらのほりあい関係は、いずれも他者の二極関係構造をなしている。

問題は、定称と不定称のほりあい関係である。このほりあい関係は、これまでのほりあい関係すなわち中心点（発言者・聴者、異次元の発言者、想定上の聴者）とその心的領域のほりあい関係というものは異なり、話し手側において指される内容が判別しうるか否かというほりあい関係へと移行してしまう。定称は、話し手が指す内容を判別しうるような領域、不定称は、話し手が指す内容を判別しえないような領域である。

話し手が、指す内容を判別しうるような領域というものは、認識主体（話し手）を中心とする一種の心的領域とみなせないこともないが、これを称格とするならば、その称格を表わす語

としては、「かれ」「かのじょ」のような語だけにはとどまりそうにない。

「かれ」「かのじょ」は、前にも述べたように、自称と対称、近称と遠称のはりあい関係を越えて用いられる。そういう意味では、純粹に定称に位置づく語とみなした。しかし、同様の用法は、普通名詞の「人」にもある。たとえば発言者を指して「人(ワタクシ)を驚かすな」といえるし、聴者を指して「人(キミ)を馬鹿にしているね」ともいえる。また、異次元の発言者を指して「人(ワタクシたち)をよく笑わせるよ」といえるし、遠称としては「人(カレ、カノジョ)を頼りにしてはいけないだろうなあ」ともいえる。

親族名称や地位名称なども同様に用いられ、現にその用法に基いて、これらの語を代名詞と認めたいとする論もある(注12)。

さらに、極端な例をあげると、人に関係しない、ものを表わす「机」というような語にもその用法が認められる。たとえば、発言者を中心とする心的領域に属するものと認めている机を指して「机の上におきなさい」といえるし、聴者を中心とする心的領域に属するものと認めている机を指して「机を傷つけるな」といえる。さらに、異次元の発言者を中心とする心的領域に属するものと認めている机を指して「(これらの)机をあそこへ運ぼう」といえるし、想定上の聴者を中心とする心的領域に属するものと認めている机を指して「(あその)机をここへ運ぼう」とも表現しえる。

いわゆる、定称と不定称を称格と認めれば、名詞も代名詞的となり、名詞と代名詞の区別がつきにくくなる。既に述べたように、代名詞を話し手が、発言者を中心として、それと他者との間に構成される種々の心的領域のはりあい関

係を把握し、概念化して表現する語ととらえるならば、厳密な意味での称格は、自称と対称、近称と遠称の四称であると認めた方が妥当であろう。そして、話し手が、指す内容を判別する否かで対立する定称と不定称は、代名詞と名詞との接点をなすところで、称格としての性格はかなり薄らいているものと解される。既にみたように、D系の語も、自称と対称、近称と遠称のはりあい関係を越えて用いられる。松下文法で、D系の語を名詞の一種とし、未定名詞とした理由も肯ける。

理論的には以上のものであっても、ここでは一応、定称と不定称も称格と認めて体系表に位置づけておいた。

また、代名詞を一品詞と認めるか否かについては、一品詞と認めず、それぞれの構文的機能によって、各品詞に分属させる方が妥当であると考える。そうした後に、意味的側面から「称格語」とでも称して、一括する必要があるかと考える。

## 7. 琉球方言の代名詞における二極関係構造

まず、沖縄本部町瀬底方言における代名詞の体系を示すと、第10表の通りとなる。なお、琉球方言におけるko系、o系、a系、ido系は、共通語のコ系、ソ系、ア系、D系に対比させられる。

第10表からもわかるように、瀬底方言では、発言者と聴者の対立は明確であるが、話材におけるko系とo系は、語形は異なっても、意味的にはほとんど対立を示さない。たとえば、ko系のφuriもo系の?uriもともに「これ、それ」の意味で用いられる。この意味で、第10表ではko系とo系は点線で示してある。瀬底方言で、ko系とo系が対立を示さないのは、同方言で

第10表 瀬底方言・代名詞の体系

関係	状態	方向	場所	事物	人	話材	人	範疇			品詞	
								対話者	自称(自1)	近称(自2)		定称(自3)
φunu (この その)	hanfi (こう そう)	φumaŋgati (ここへ そこへ)	φuma (ここ そこ)	φuri (これ それ)	φuri (これ, それ) φunŋfu: (この人 その人)	ko 系	wa: (わたくし) wan (わたくし)	発言者	自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)	品詞
?unu (この その)	hanneɪnu (こんな そんな)	?umaŋgati (ここへ そこへ)	?uma (ここ そこ)	?uri (これ それ)	?uri (これ, それ) ?unŋfu: (この人 その人)	o 系	?ia: (きみ) na: (あなた) nanɔŋu (あなた)	聴者	自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)	品詞
?anu (あの)	?anne:nu (こんな そんな あんな)	hamaŋgati (あそこへ あそこへ)	hama (あそこ) ?ama (あそこ)	?ari (あれ)	?ari (あれ) ?anŋfu: (あの人)	a 系			自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)	品詞
tʃanu (どの)	tʃatʃi (どう) tʃa: (どう)	ra:ŋgati (どこへ)	ra: (どこ)	diru (どれ) nu: (なに)	taru(誰) tanŋfu: (どの人)	ido 系			自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)	品詞
連体詞	副詞	名詞										

?aga:mi (私たち)という代名詞があらわれ  
ことと決して無関係ではないと考えられる。

?aga:miはまさに近称の中心に位置する代名詞  
ともいうべきもので、発言者と聴者を一体化し  
た異次元の発言者を表わす(注13)。同方言に  
は、「私たち」という意を表わす語として、  
?aga:miの他に watta: という語形もあるが、後  
者は自称に位置する複数形で、これは対称の複  
数形 ?itta: (君たち) nanta: (あなたたち)  
などを意識においた場で用いられる。これに対  
して、前者は、聴者も含めて、発言者を中心と  
するその周辺のものすべてを一体化意識でとら  
えてしまい、なんらかの対立者というものをほ  
んど意識しない。これは、第10表からもわか  
るように、近称に対する遠称の中心に位置すべ  
き具体的な他者が存しないからだとも解される。  
?aga:mi は漠然たる聴者(想定上の聴者)の  
存在は予定していても、その聴者との対立関係  
に中心をおいた表現ではなく、むしろ発言者と  
聴者との一体化意識に中心をおいた表現なので  
ある。このように、同じ「私たち」の意を表わ  
しながらも、watta: と ?aga:mi は位置づく称  
格が全く異なる。

以上のように、同方言では ko系と o系は対  
立を示さず、話材は近称(ko系・o系)と遠  
称(a系)とが対立する二極関係構造をなす。  
沖縄本島方言は、ほとんどそのような体系をな  
す。

沖縄本島でも北部国頭村の方言では、この二  
極関係構造が、もっと明確な形をとってあらわ  
れる。すなわち、話材で ko と o系が語形でも  
区別を失なっているところがある。たとえば、  
沖縄国頭村与那や同謝敷等がそうである。与那  
方言では、代名詞は第11表のようにあらわれる。

同方言では、o系はあらわれない。そして、

話材では近称(ko系)と遠称(a系)の二極  
関係構造を示す。

謝敷方言では、代名詞は第12表のようにあら  
われる。

同方言では、ko系はあらわれない。そこでは  
近称(o系)と遠称(a系)とが対立している。

次に、同じ二極関係構造を示しても、宮古・  
八重山方言の代名詞は多少異なっている。たと  
えば、八重山石垣市川平方言の代名詞は、第13  
表のようにあらわれる。

同方言では、対話者における発言者と聴者、  
および話材における ko系と o系の対立は明確  
であるが、話材における o系と a系の対立は漠  
然としていて、はっきりしない。すなわち、o  
系の uri は「それ、あれ」の意で用いられ、ka-  
ri (あれ)とその用法が区別しにくい。川平方  
言では、自称と対称の二極関係構造を示す。宮  
古・八重山方言はほとんどこのような構造を示  
す。

この自称と対称の二極関係構造は、八重山波  
照間方言では、もっとはっきりした形をとって  
あらわれる。同方言の代名詞を示すと、第14表  
の通りとなる。

同方言では、a系はあらわれず、語形のうえ  
でも ko系と o系が対立を示す構造となってい  
る。

以上みてきたところを、話材(不定称は除く)  
に限ってその関係構造をまとめ、さらに共通語  
とも比較すると、第15表のようになる。

第11表 与那方言の代名詞

関係	方角	場所	事物	人	話材	人	対話者	称格			
								自称(自1)	近称(自2)	定称(自3)	
φunu (この その)	φumagaŋfi (ここへ そこへ)	φuma (ここ そこ)	φuri (これ それ)	φuri (これ それ)	ko 系	wa: (わたくし) wan (わたくし)	発言者	対称(他1)	近称(自2)	定称(自3)	不定称(他3)
φanu (あの)	φamagaŋfi (あそこへ)	φama (あそこ)	φari (あれ)	φari (あれ)	a 系						
dgiru (どの)	dza: ɸgaŋfi (どこへ)	dza: (どこ)	dgiru (どれ)	ta: (誰) taru (誰) tan (誰)	ido 系						

第12表 謝敷方言の代名詞

範疇	称格		対話者	人	話材	人	事物	場所	方向	関係	不定称(他3)		
	定称(自3)											近称(自2)	遠称(他2)
	自称(自1)	対称(他1)											
発言者	聴者	発言者	聴者										
	wa: (わたくし)	wan (わたくし)	wa: (おまえ)	na: (あなた)	o 系	?	?	?	?	?			
	?	?	?	?	a 系	?	?	?	?	?			
	?	?	?	?	ido 系	tan (誰)	dʒiru (どれ)	dza: (どこ)	dza: tʃi (どこへ)	dʒin (どの)			



第14表 波照間方言の代名詞

関係	場所	事物	話材	人	対話者	範疇 称格	
						自称(自1)	定称(自2)
kunu (この)	mo (ここ)	kuri (これ)	ko 系	ba: (わたくし)	発 言 者	自 称 (自1)	定 称 (自2)
unu (その あの)	ha (そこ あそこ)	uri (それ あれ)	o 系	da: (きみ あなた)	聴 者	対 称 (他1)	
dzanu (どの)	dza (どこ)	dzaru (どれ)	ido 系				不 定 称 (他2)

第15表

先 島			沖 繩				共 通 語		
波 照 間	川 平		謝 敷	与 那	瀬 底		コ 系	自 称	近 称
ko 系	ko 系	自 称		ko 系	ko 系	o 系	ソ 系	対 称	
o 系	o 系	対 称	a 系	a 系	a 系		ア 系		遠 称

琉球方言では、先島（宮古・八重山）が〔自称 / 対称〕、沖縄が〔近称 / 遠称〕の一元的二極関係構造を示すのに対し、共通語は、まず〔自称 / 対称〕の一次的対立関係があり、そのうえにさらに〔近称 / 遠称〕の二次的対立関係があるような二元的二極関係構造を示す。そして、琉球方言・共通語ともに、その体系の基底には自他の二極関係構造が存しているという点においては共通している。

このように、琉球方言をも含めて代名詞の体系を考察してみると、従来のコソアを対等に、平面的に並列するような体系の示し方は適切でなく、やはり自他の二極関係構造で、重層的・立体的に示した方がより妥当であると考えられる。

- 注1 岡村和江「代名詞とは何か」(『品詞別日本文法講座 名詞・代名詞』昭和47年 明治書院) 101 頁
- 2 高橋太郎「『場面』と『場』」(『国語国文』第25巻第9号所載。昭和31年)なお、この高橋論文も、永野賢「言葉の使い分けに関する基本問題」(『国語と国文学』昭和24年3月号)、「相手という概念について」(『国語学』第9輯)に基いている。
- 3 井手至「代名詞」(『続日本文法講座』昭和33年 明治書院)
- 4 三上章『現代語法新説』(昭和30年) 179頁
- 5 池上秋彦「代名詞とは何か」(『講座日本語の文法』3 昭和42年 明治書院)
- 6 注1の岡村論文
- 7 大野晋『日本語の文法を考える』(昭和53年 岩波) 152 頁
- 8 注7の文献 74頁

9 注3の文献 121 頁

10 日本古典文学体系『万葉集』(岩波)による。

11 鈴木孝夫『ことばと文化』(昭和48年岩波)

12 注11の文献

13 拙論「奈良時代の人称代名詞について」(『都大論究』第10号 昭和47年 東京都立大学国語国文学会 「琉球方言における人称代名詞」(『琉球の方言4』昭和53年 法政大学沖縄文化研究所)「アガミ意識とワッター意識」(『琉球の方言5』昭和54年 法政大学沖縄文化研究所)

以上の他、次の文献も参考にした。

服部四郎「意味」(『岩波講座哲学 言語』(昭和46年)

山口佳紀「体言」(『講座日本語6 文法1』(昭和51年 岩波)